中方遺跡

佐東川小規模河川改修に伴う確認調査

1989

静岡県小笠郡大東町教育委員会

例　言

1. 本書は、静岡県小笠郡大東町中方字富士森376他に所在する中方遺跡の試掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、佐束川小規模河川改修に先立つもので、中方遺跡の範囲確認をする目的で実施されたものである。
3. 発掘調査主体者は大東町教育委員会であり、第1次調査を中山俊之（社会教育課）、第2次調査を粕谷崇（國學院大學大学院）が担当した。
4. 調査期間は、第1次調査を昭和63年6月27日から8月4日まで、第2次調査を11月19日から26日まで実施した。
5. 本書に掲げた実測図におけるレベルは海抜を示し、方位は磁北を指示する。
6. 本書の作成は、中山俊之、粕谷崇が中心となって行なった。
7. 発掘調査から報告書の作成に際して、下記の方々の御指導、御援助を賜わった。

五藤康司（静岡県教育委員会文化課）　青木豊（國學院大學考古学資料館学芸員・國學院大學講師）　内川隆志（國學院大學考古学資料館学芸員）　宮岡久（埼玉県入間市教育委員会）
松井泉（相模原市古渕B遺跡調査会）　中沢達也・林弘之・河合修（國學院大學学生）

（順不同敬称略）

第Ⅰ章　調査に至る経緯

町内には一級河川である菊川をはじめ、その支流が数多く流れている。大東町は、菊川の下流であることもあり梅雨等の雨の多い時期にこれらの河川は大はばに増水し、中には決壊寸前にまでなるものもある。災害を防止する為、町内の河川では毎年河川改修を実施されている。佐東川も毎年河川改修を実施している河川の一つであるが、これは周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている中方遺跡のほぼ中央を流れていることから、工事主体である袋井土木事務所と協議の結果、予備調査を実施することにした。この調査は工事との関係、また他の遺跡の調査との関係により、緊急に実施しなければならなかった。

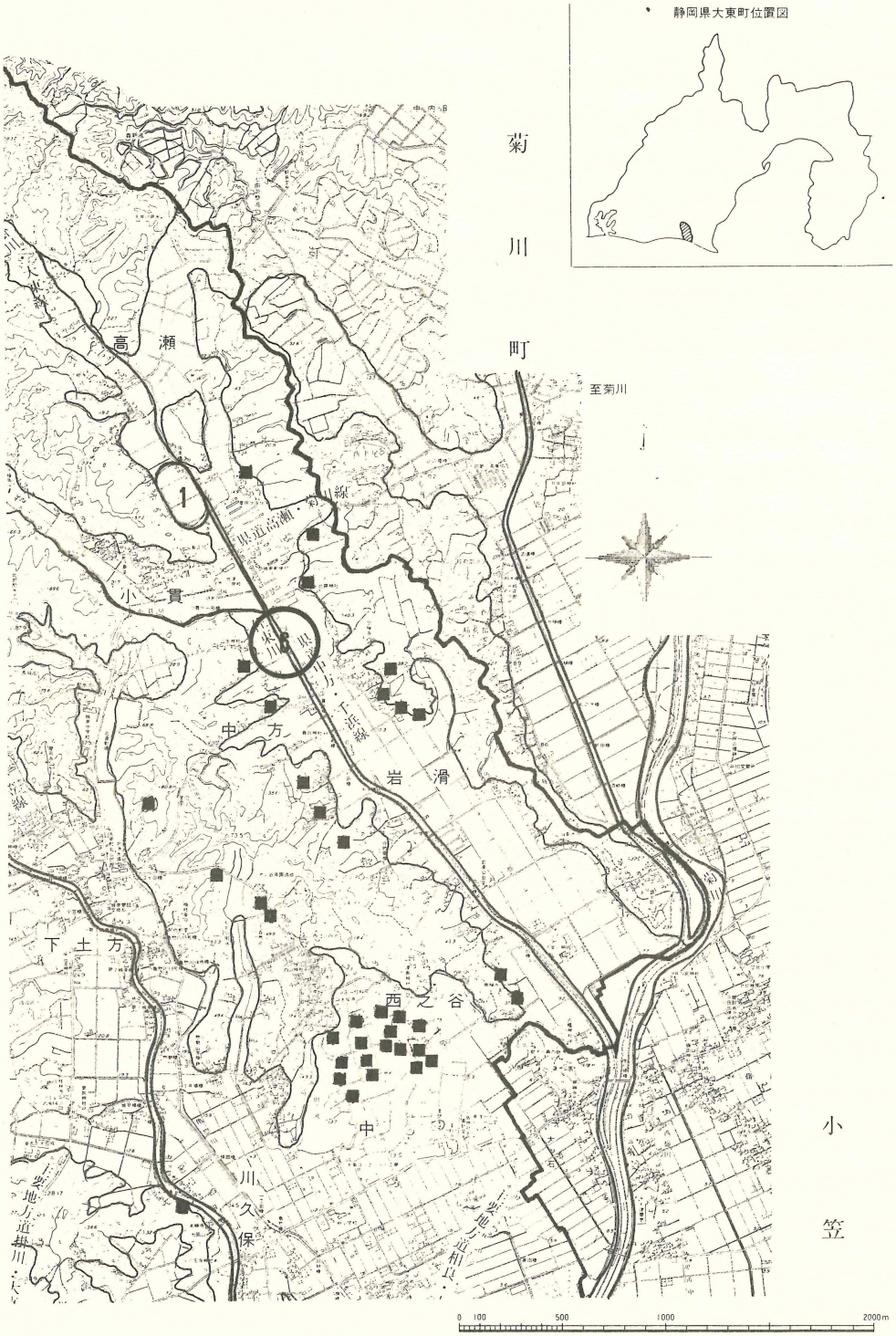
調査はトレンチによるものである。右岸に２×２ｍを５箇所、左岸に２×３ｍを６箇所を15ｍ間隔で千鳥配列で設定し、左岸下流からａ－１、ａ－２…ａ－６、右岸下流からｂ－１、ｂ－２…ｂ－５と呼称した。そして状況に応じて拡張する方針で実施した。その結果、ａ－１、ａ－４で遺物の出土が認められ、左岸全域の拡張を検討したが梅雨時でもあり、安全上の問題からａ－１、ａ－４付近のみ拡張して行なうことになった。そして新たにａ－１付近をＡ区、ａ－４付近をＢ区と呼称することにした。

第Ⅱ章　地理的・考古学的環境

大東町は、菊川、牛渕川をはじめそれらの支流によって複雑に開析された平野部を有する。この平野部は、現在宅地の他、水田、畑として利用されている。毎年河川改修が行われている佐東川周辺も例にもれず、大部分が水田地帯となっている。今回、河川改修に先立って確認調査を実施することになった中方遺跡は、佐東川の両岸の水田地帯に広がる遺跡である。この地域は谷状になっており、上流域には弥生時代、古墳時代の遺跡である高瀬遺跡（第１図１）がある。中方遺跡（第１図６）もほぼ同時期の遺跡であるが、それ以前の先土器時代、縄文時代の遺跡は確認されていない。佐東川の両岸の丘陵には、八ツ谷、清水ケ谷、松ケ谷、鳥見ケ谷横穴群の他、多くの横穴群が確認されている（■印）。古墳時代の集落等の遺跡は少ないが、当該期の遺跡数はトータルでは増大していることがいえる。周辺では奈良、平安時代の遺跡は確認されていないが、大須賀町には清ケ谷古窯址群が形成されてくること等から、この時代の遺跡の存在する可能性は強いといえる。中世に入ると高天神城が築城され、またそれに関連した城館が数多く建てられていることから、再び増大傾向を示すようである。しかし、城館の位置は不明瞭なものが多く、また中には城館の存在自体疑問視されているものもあることから、ここでは図示しない。その後の時代の遺跡は見当たらず、今後の成果を待ちたい。

中方遺跡のように高燥な台地ではなく、谷部に位置する遺跡は、遺跡の立地条件からも重要

性を増していくものと思われる。



第1図　遺跡位置図

第Ⅲ章　第１次調査の概要

第１節　調査の経過

調査は昭和63年６月27日から８月４日まで行なったが、雨が多くまた粘土質のため困難な点が多く、延べ25日に及んだ。以下主だった経過を記す。６月27日、調査区の草刈及びトレンチを設定する。28日、ベンチマークを設定し、重機により表土及び以前に行なわれた改修工事の際の盛土を剥ぎ、左岸より調査を開始する。７月４日、ａ－1、ａ－4から主に平安時代、中世の遺物を確認する。９日、写真撮影を行ない、左岸の調査を終了する。続いて右岸の調査を開始する。15日、右岸はすべて攪乱、盛土であることがわかり、調査を終了する。19日、協議の結果を踏まえ、拡張区の設定をする。20日、重機による拡張区の表土剥ぎ及び調査を終了したトレンチの埋め戻しをする。22日、Ａ区で土坑、Ｂ区で溝状遺構、ピットを検出する。８月１日、Ａ区、Ｂ区の実測、写真撮影を終了する。４日、重機により埋め戻しを行ない、機材を撤収し全ての現地調査を終了する。

第２節　基本層序（第３図１）

本遺跡は、佐東川によって開析されたＵ字谷に位置している。現状はおおむね水田であり、遺跡の保存状況は大部分が良好であると思われる。しかし、今回調査した場所は河川堤防であり、過去に改修が行なわれている為攪乱、盛土等で土層が乱れている箇所が多い。ここでは包含層、遺構の保存状況が比較的良好であったＢ区の層序を記しておく。

第１層　表土層

褐色土で小礫を若干含む。粘性やや強く、しまりはない。

第２層　攪乱（盛土）層

河川改修時の盛土で礫を多量に含む。土師器、須恵器、山茶碗等の小片を含む。粘性やや強くしまりはあまりない。

第３層　暗褐色土層

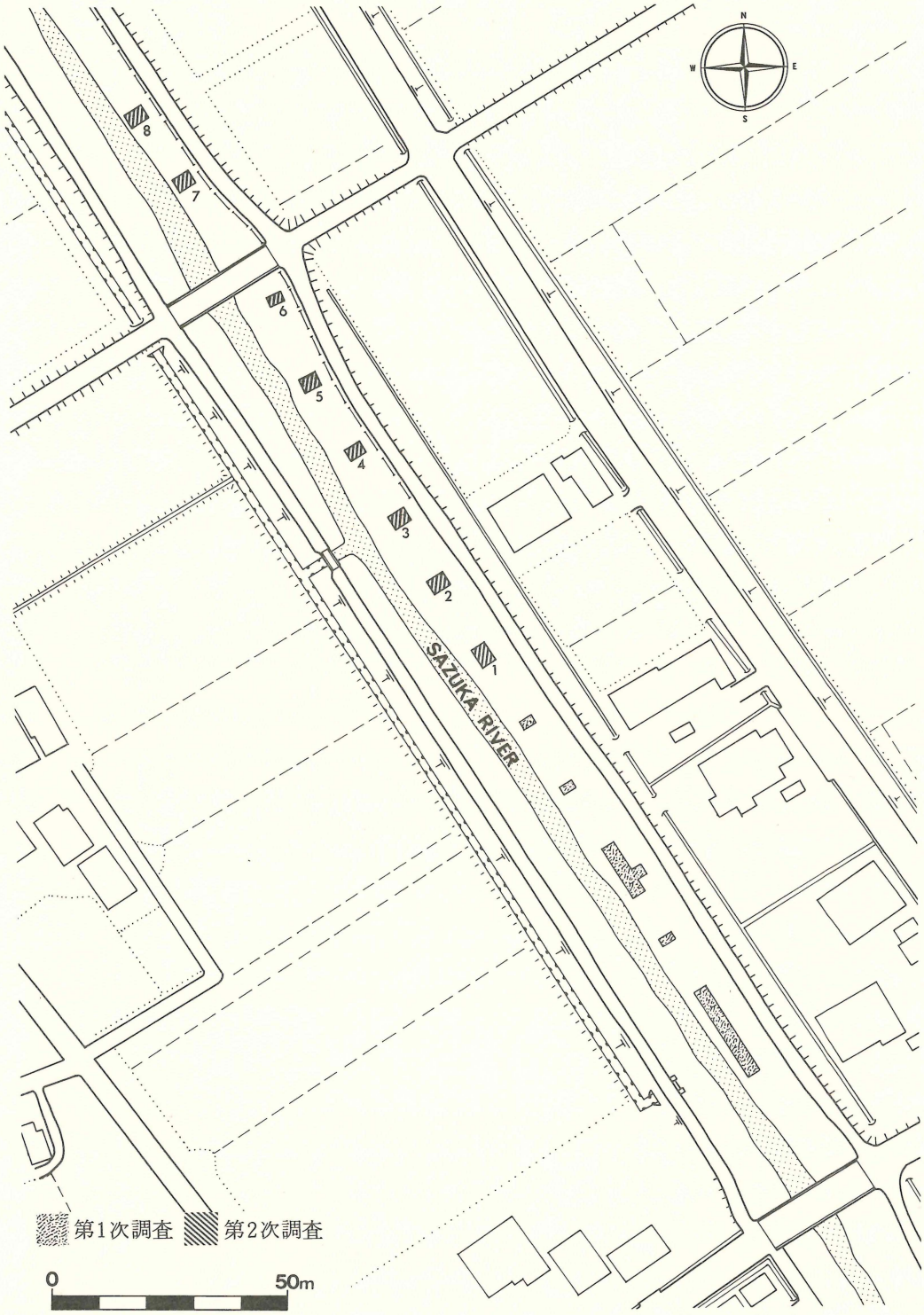
酸化鉄、炭化物を少量含む。粘性強く、しまりがある。層の厚さがなく、平安時代、中世等の遺物が混在している。

第４層　青灰色シルト層

酸化鉄を少量含む。粘性強く、しまりがある。遺構はこの面で確認される。

第５層　黄褐色シルト層

酸化鉄を多量に含む。粘性強く、しまりがある。



第２図　第１次・２次トレンチ配置図

第３節　第１次調査の遺構と遺物

ａ．Ａ区の検出遺構

Ａ区では土坑３基が検出されている。確認面は第４層であり、覆土はいずれも単一層である。覆土は褐色土層で炭化物を少量含んでおり、粘性強く、しまりがある。

ＳＫ001（第３図２）

平面形はほぼ楕円形を呈しており、長径120 cm、短径90 cm、深さ約10 cmを測る。断面形は皿状であり、底面は平坦である。遺物の出土はない。

ＳＫ002（第３図４）

平面形はほぼ円形であり、長径65 cm、短径60 cm、深さ約20 cmを測る。断面形は皿状であり、底面は平坦である。遺物は土師器の小片が出土しているが、時期など詳細は不明である。

ＳＫ003（第３図３）

平面形は不整楕円形を呈しており、長径145 cm、短径90 cm、深さ約15 cmを計る。断面形はほぼ皿状であり、底面は平坦である。遺物は土師器の小片が出土しているが、時期など詳細は不明である。

ｂ．Ｂ区の検出遺構

Ｂ区では井戸１基、溝状遺構３条、ピット４基が検出されている。

ＳＥ001（第３図５）

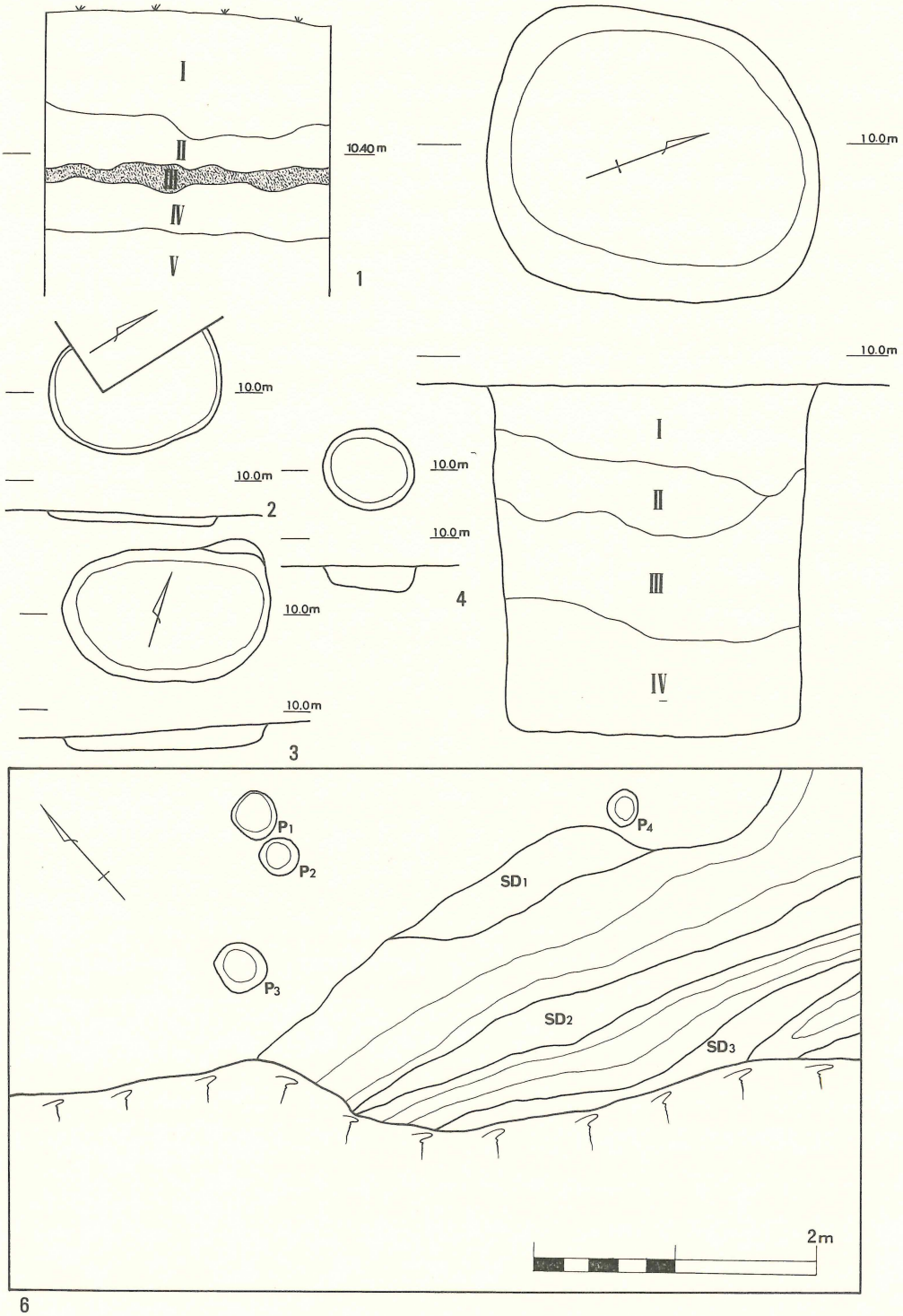
平面形はほぼ隅丸方形であり、長径230 cm、短径200 cm、深さ約250 cmを測る。断面形は円筒状で素掘りである。遺物の出土は１層のみからである。かわらけ、山茶碗が多いが、それらに混ざって高坏等の出土がみられる。覆土は以下の通りである。

1.　暗茶褐色土層　青灰色シルトブロックを多量、炭化物を少量含む。粘性強く、しまりあり。
2.　黒褐色土層　　青灰色シルトブロックを少量含む。粘性強く、しまりあり。
3.　黒褐色土層　　青灰色シルトブロックを多量に含む。粘性強く、しまりあり。
4.　暗褐色土層　　黄褐色、青灰色シルトブロックを多量に含む。粘性強く、しまりあり。

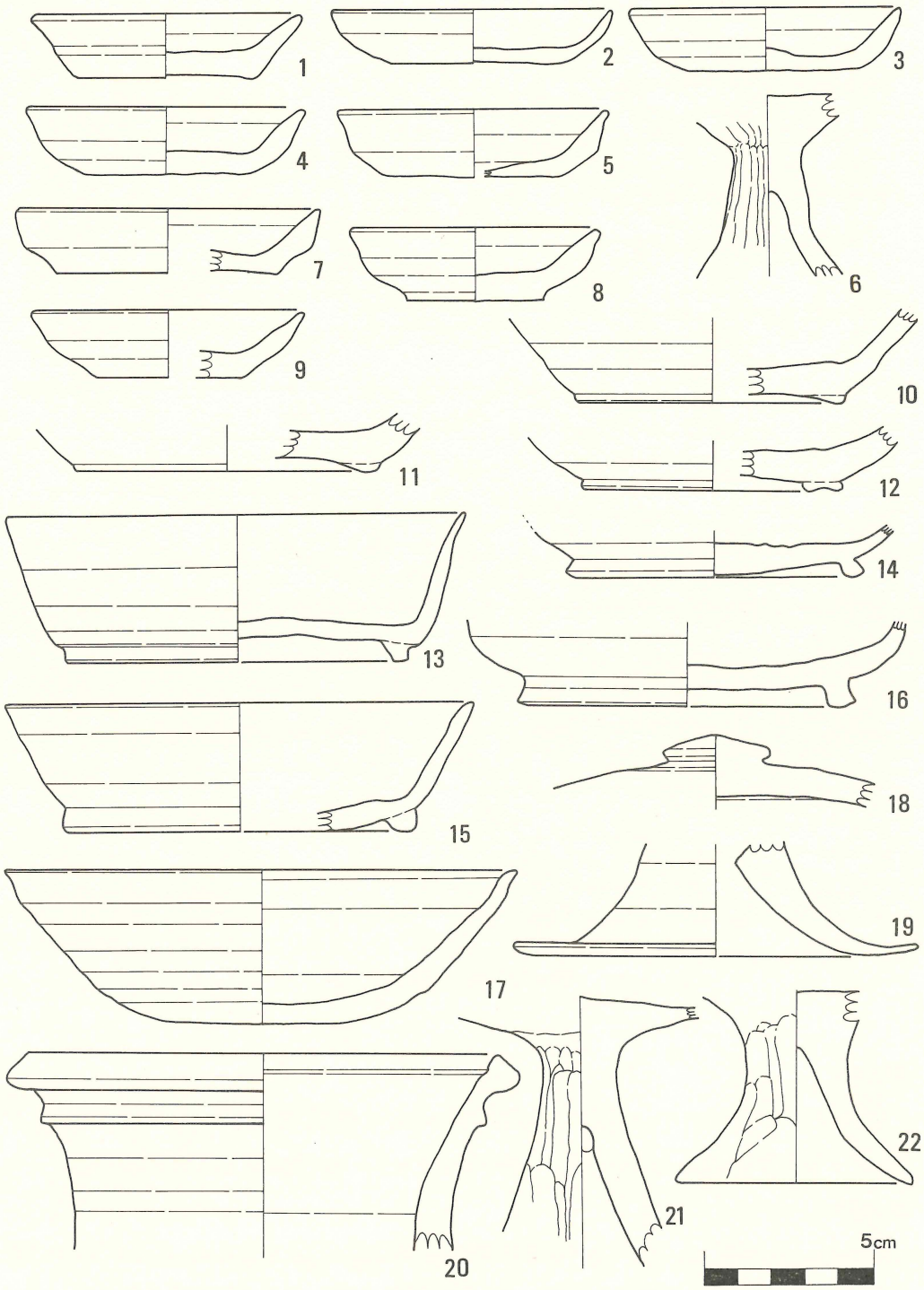
ＳＤ001（第３図６）

全長は調査区の限定、攪乱をうけていることから不明であるが、幅約90 cm、深さは約20 cmを測る。断面形は浅いＶ字状を呈し、覆土からは土師器、須恵器、かわらけの他に高坏、甑の把手等が多量に出土している。覆土は単一層で以下の通りである。

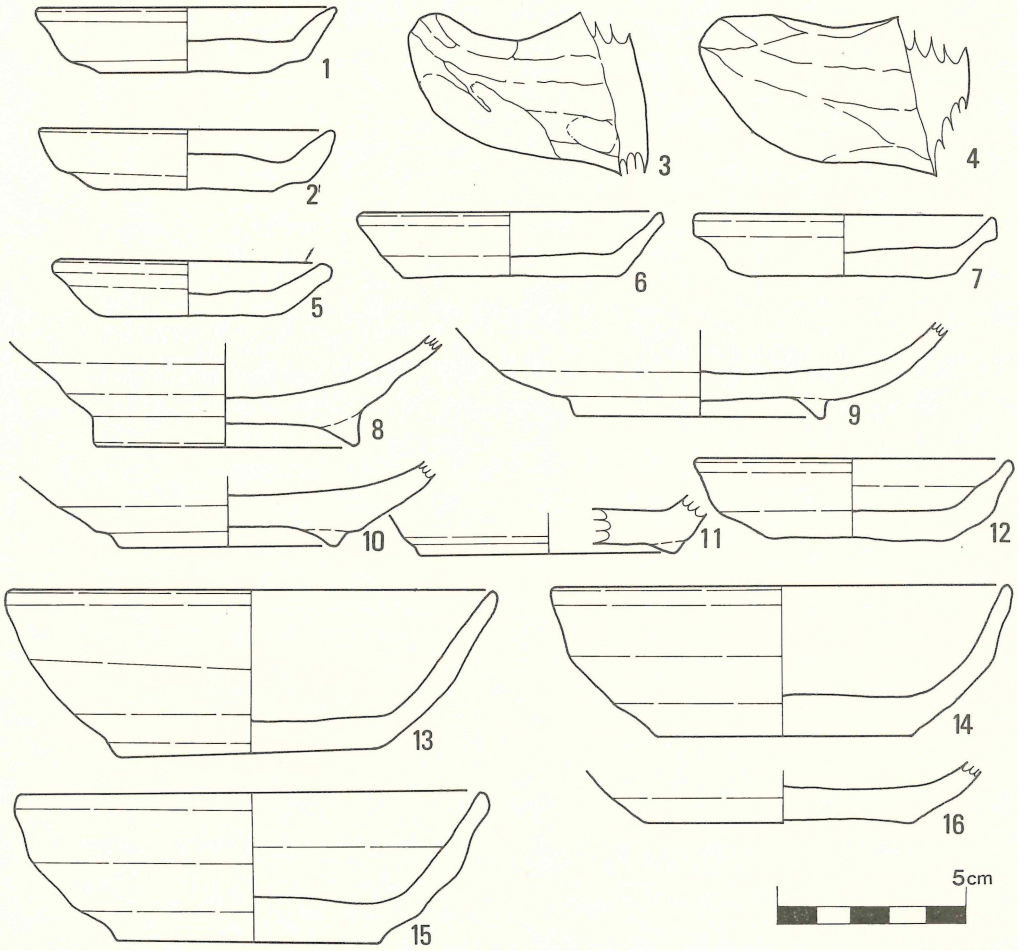
1.　暗褐色土層　炭化物を若干含む。粘性強く、しまりややあり。



第３図　基本層序及び検出遺構



第4図　出土遺物－1



第5図　出土遺物－2

SD002

SD001に平行しており、幅約50 cm、深さ約10 cmを測る。断面形はU字状を呈す。土師器の小片等が多量に出土しているが、詳細は不明である。尚、覆土はSD001に準じる。

SD003

SD001、SD002と平行しており、幅約30 cm、深さ約10 cmを測るが、ごく一部しか残存していない。断面形はU字状を呈している。出土遺物はない。覆土はSD001に準じる。

ピット

ピット1は径約30 cm、深さ約30 cm、ピット2は径約25 cm、深さ約25 cm、ピット3は径約35 cm、深さ約35 cm、ピット4は径約20 cm、深さ約20 cmを測る。柱穴と考えられるが、プラン等は不明である。出土遺物はない。覆土は暗褐色土単一層で炭化物を若干含み、粘性強く、しまりあり。

第4節　小　結

本調査は、佐東川の小規模河川改修に先立って実施されたもので、調査面積は147 m^{2}に及ぶ。佐東川は、本遺跡のほぼ中央を流れている為、両岸にトレンチを設定して遺構、遺物及び土層の確認を行なったが、右岸は以前に実施された改修時の盛り土、または攪乱のため遺構、遺物の検出は認められなかった。しかし、右岸とは対象的に左岸では当初の予想よりも比較的遺跡の保存状態がよく、遺構、遺物を検出することができた。左岸に設定した6箇所のトレンチのうち、下流側のa－1及びa－4で遺物が第Ⅲ層から出土しており、他のトレンチでは遺物の出土はなく、また第Ⅲ層自体も存在していない。この第Ⅲ層は厚さが約10～20 cmであるが、上層の第Ⅱ層が攪乱層であることから、ある程度削平されていることが考えられ、また他のトレンチは第Ⅱ層の下層に第Ⅳ層があることから、第Ⅲ層はすでに削平されてしまっていると考えられる。このことから遺跡自体は断続的なものではなく、調査区域全体に存在していたのであろう。これは拡張された調査区から遺構、遺物が検出されたことからも裏付けられよう。

今回の調査で検出された遺構は、a－1を拡張したA区で土坑3基、a－4を拡張したB区では井戸址1基、溝状遺構3条、ピット4基である。これらの遺構は、第Ⅳ層で確認されている。土坑の時期は遺物が小片であることと、器面の風化が激しい為不明である。井戸址からは、かわらけ（第4図1～8）、山茶碗（第4図10～12）等が出土しており、山茶碗は13世紀前半から14世紀前半のものである。しかし、5世紀代の高坏（第4図6）等が共伴していること、覆土は自然堆積と考えられ、その最上層からの出土であることから流れ込みの可能性が強く、このことから山茶碗の年代を井戸址の年代にあてはめることはできず、それ以前のものと考えられる。溝状遺構で遺物が多かったのはSD001であるが、須恵器（第4図13～18）、かわらけ（第5図1～2）、高坏（第4図21～22）、甑（第5図3～4）の他、山茶碗、土師器が出土している。須恵器は9～10世紀前半であるが、これらも井戸址同様流れ込みによるものであり、判然としないがその時期と考えてよいだろう。ピットからの出土遺物はなく時期は不明であるが、他の遺構と大差はないと思われる。遺構外出土遺物は大部分が中世のものであるが、土師器、須恵器も混在している。図示したのは小皿（第5図6～7）、山茶碗（第5図8～11）である。

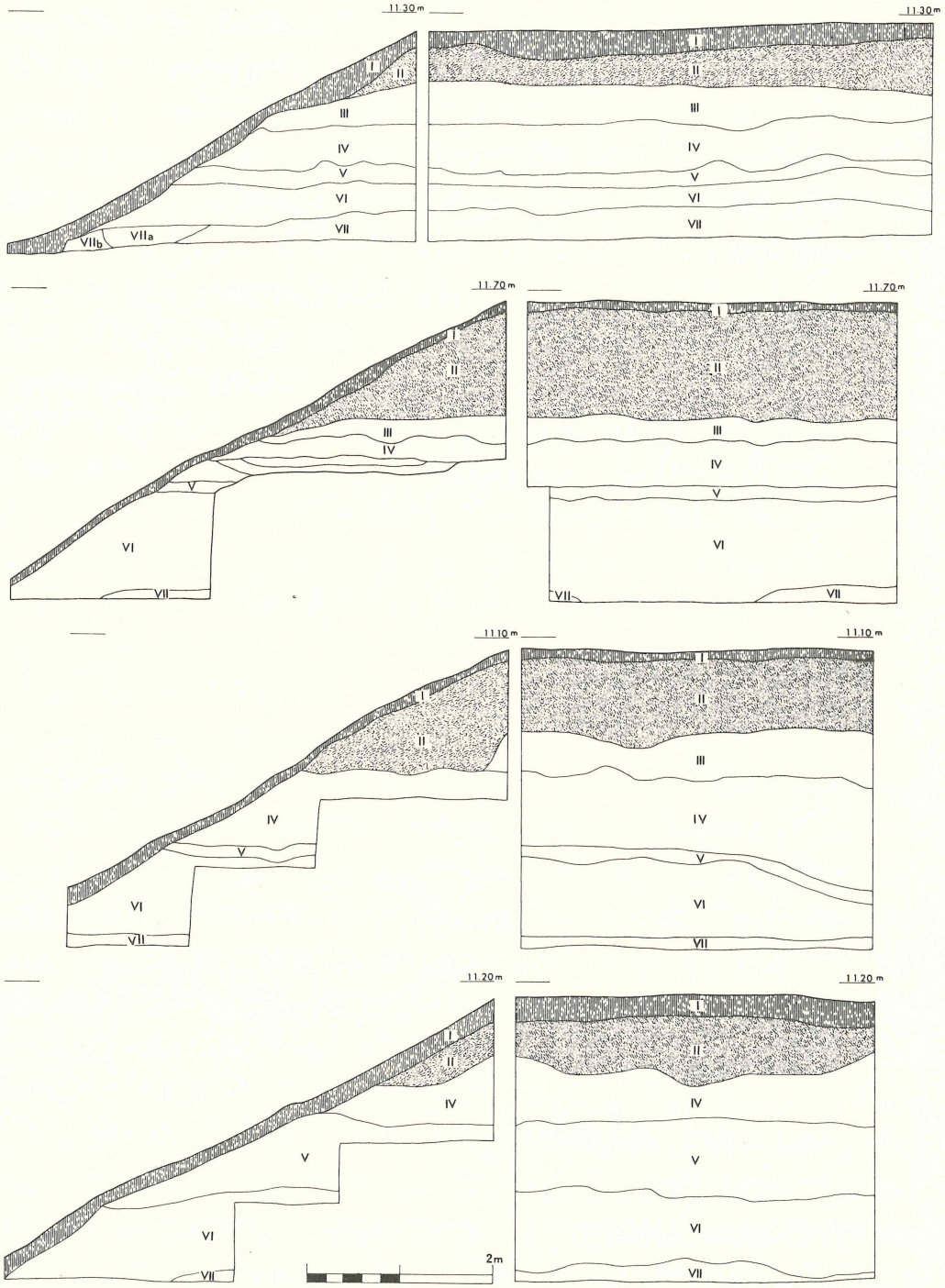
第Ⅳ章　第２次調査の概要

第１節　調査経過

本調査は、昭和63年11月19日より同年11月26日までの８日間に亘って実施された中方遺跡第２次調査である。この第２次調査は前回の第１次調査と同様に佐東川の護岸工事に先立つもので、中方遺跡の範囲確認を目的としている。調査期間中は、半日雨のために作業ができなかった他は天候にも恵まれ、無事期間内に調査を終了することができた。

今回の第２次調査の調査範囲は、前回の第１次調査の行われた地点よりも上流、約150ｍの範囲である。そのため調査方法としては、川の両岸に約３ｍのトレンチを交互に15ｍほどの間隔に設定し、重機によって表土を除去した後、階段上に掘り進むことにした。この階段状に掘り込む方法は、雨が降ると調査区の土層が主として粘土層であるため壁が崩れやすい、また川からトレンチ内に水が流れ込むことを考慮したためである。初めに設定したトレンチは、左岸に５箇所、右岸に４箇所、計９箇所であり、さらに遺物の出土状況、調査の進行状況に応じて、拡張または新しく調査区を設定することにした。さらに、本調査は範囲確認調査でもあることより、遺物は層ごとに一括して取り上げることにした。

19日、調査区はブッシュがひどいため、表土は重機によって除去。右岸の４つのトレンチは以前の護岸工事による盛土部であったため、左岸の５箇所を調査対象とすることにする。一番南側を第１トレンチ、上流になるにしたがって第２、第３、第４、第５トレンチとし、まず第１～３トレンチの調査を開始する。さらに、第１トレンチは、表土を取り除く際に遺物の破片が検出されたため、南側に２ｍの拡張を行う。20日、第１トレンチの第Ⅳ層下面より土師器片が多数検出。第２トレンチでは、第Ⅳ層より土壙と思われる遺構を確認し平面プランの写真撮影。21日、第４・５トレンチの調査開始。22日、第１・２トレンチ以外は遺物・遺構の検出が余り見られないため、新しく上流に３つのトレンチを設定し、第６・７・８トレンチとする。第１トレンチでは、第Ⅴ層下面とⅥ層上面より須恵器・土師器の遺物が検出されるが、ほとんどが南側に集中していたため、トレンチの北側を１ｍほど幅で掘り下げる。23日、ベンチマークの移動を行い、11.812ｍとする。第２トレンチの土壙を完掘し、実測及び写真撮影を行う。第６・７・８トレンチの調査を開始するが、遺物はほとんど検出されず。24日、午前中は雨のため待機。午後より、第６～８トレンチの精査を行う。第１トレンチでは、第Ⅵ層中及びⅦ層中より土師器が検出される。25日、各トレンチの精査と完掘状況の写真撮影。26日、各トレンチのセクション図を作成したのち機材を撤収し、全作業を終了する。



第6図　第2次調査基本層序

第2節　基本層序（第6図）

今回行われた調査範囲における層序は、総じて平行の堆積をしており、第Ⅲ層以下には上層からの攪乱はほとんど見られなかった。また、各トレンチ間の層序には多少の相違が認められた。特に、最北に設定した第8トレンチは第Ⅲ層、それにつぐ第7トレンチは第Ⅲ、Ⅳ層を確認することができなく、トレンチによっては、第Ⅶ層に帯状に腐食土、砂の混入が見られた。全体的には各層とも北から南へと次第に薄くなる傾向がある。以下、本調査によって設定できた基本層序について説明を加える。

第Ⅰ層　表土　直径3cm前後の礫を少量と、有機物とを混入する褐色土。 堤防構築時の盛り土で、近世の陶磁器片を包含する。粘性は弱く、しまりがない。

第Ⅱ層　攪乱層　人頭大の礫を少量含む灰褐色土。堤防構築時の盛り土で、土師器片、須恵器片、山茶碗片、近世陶磁器片を包含する。粘性は弱く、余りしまりがない。

第Ⅲ層　黄灰色粘土層　酸化鉄を少量含み、須恵器片、山茶碗片を包含する。粘性がややあり、固くしまりがある。

第Ⅳ層　灰褐色粘土層　酸化鉄をやや多く含み、土師器片、須恵器片、山茶碗片を包含する。粘性がややあり、しまりがある。

第Ⅴ層　黄褐色シルト層　酸化鉄を多量に含み、土師器片、須恵器片を包含する。第Ⅳ層から漸移的に変化している。粘性があり、しまりがある。

第Ⅵ層　黄白色シルト層　酸化鉄を少量含み、ところにより直径5mm前後の炭化粒を含む。土師器片、須恵器片を包含する。粘性がややあり、しまりがある。

第Ⅶ層　青灰色粘土層　水分を多く含む。粘性が強く、しまりがやや弱い。

第Ⅶa層　黒褐色腐食土層　ところどころに腐食した木片を含み、土師器片を包含する。粘性は弱く、水分を多く含み、しまりが弱い。

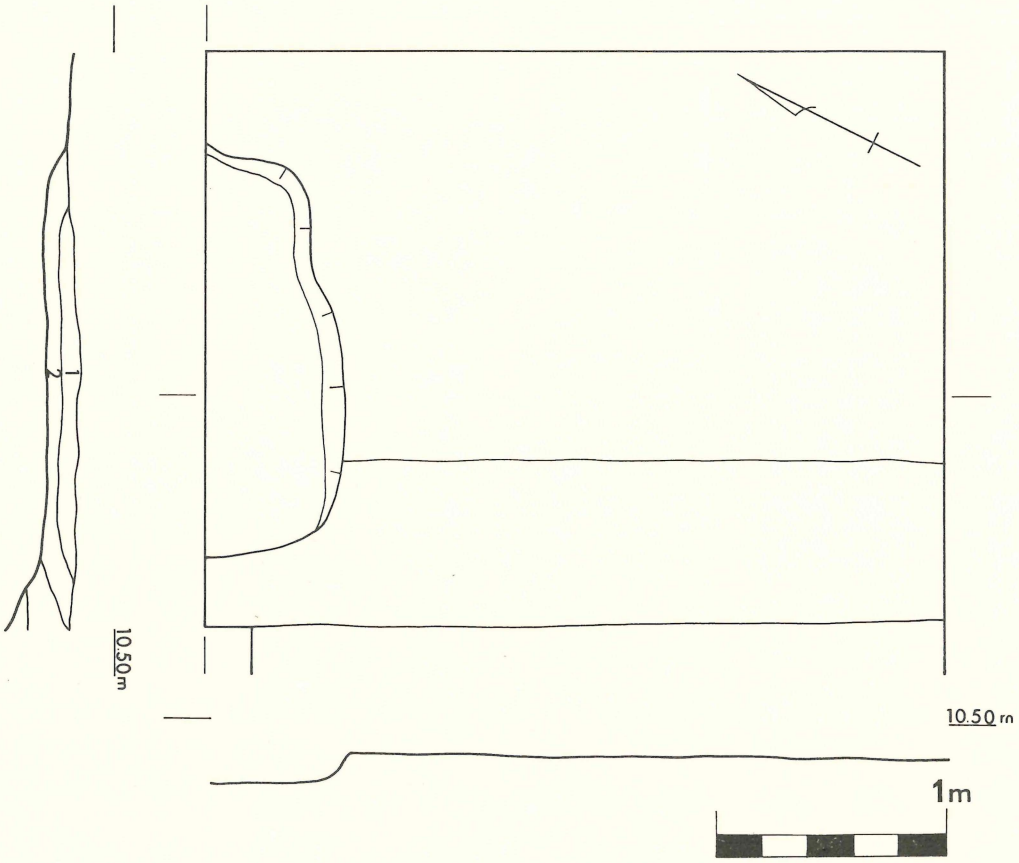
第Ⅶb層　黄褐色砂層　酸化鉄を多く含み、直径1mm前後の小礫を多量に混入する。土師器片を包含する。粘性はなく、しまりがある。

第3節　遺構と遺物

遺　構（第7図）

今回の調査で確認された遺構は、第2トレンチより検出された土壙のみである。この土壙は、第2トレンチの設定上、その一部を調査するのみになってしまい、その正確な形状については確認することができなかった。

土壙が確認された層は第Ⅳ層中であり、その現最大長は210cm、深さは14cmを測る。覆土中に遺物（土師器片等）を含むこと、隅丸方形状を呈している点から土壙とはしているものの



第７図　第２トレンチ内遺構図

住居址の可能性が高い。

この遺構の覆土は、以下の通りである。

第１層　黒褐色を呈する層で、径約1 cm程の炭化粒を含む。粘性あり。しまり若干あり。

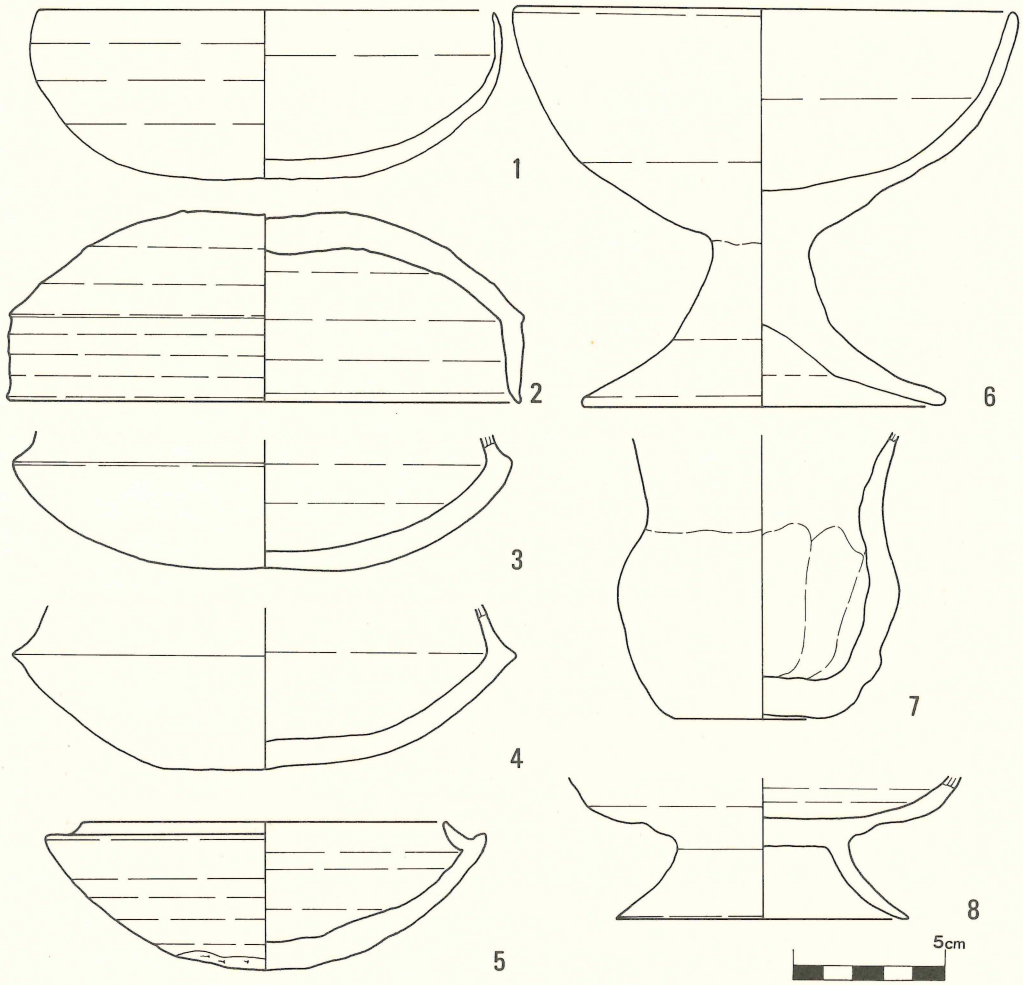
第２層　褐色を呈する層である。粘性・しまりあり。

遺　物（第８図）

本遺跡では、第７を除く各トレンチで遺物の出土が認められた。土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器等が検出され、最終的には800余点に及んだが、ほとんどが細片で、接合、復元の不可能な物が大部分を占めた。以下、遺物の概要を述べていくことにする。

土師器（第８図－1,3,4,6～8）

出土遺物の大部分が土師器である。第Ⅱ～Ⅶb層で検出され、器形は坏身、高坏、壺、甕、



第8図　遺物実測図

甑等が推定される。器面の調整は、坏身、高坏、壺、甑が全体としてナデ、甕がハケと見られ、焼成は総じてやや良である。胎土は、緻密なもの、砂粒を少量含むもの、砂粒を多量に含むものとが見られるが、いずれも軟質で風化が著しく、表面が剥離しているものが多い。

須恵器（第8図－2,5）

須恵器は第Ⅱ～Ⅵ層で数点検出され、坏身、蓋、甕等が見られる。器面の調整においては、坏身、蓋はロクロで成形したのみのものと、ロクロで成形後、ヘラケズリを施したものとがある。甕は、タタキ目の残る細片が少数検出されたのみなので、全体的には明らかでない。焼成はやや良もしくは良好である。胎土はいずれも緻密であり、灰色を呈するものがほとんどであるが、褐色を呈するものも1点検出されている。

山茶碗

腰部から底部にかけての破片が第Ⅳ層から１点検出されている。表面はロクロナデにより調整され、高台を張り付ける。胎土は緻密で、全体に灰白色を呈する。他、灰釉陶器と見られる碗の口縁部破片が第Ⅳ層より出土している。

陶磁器

第Ⅳ層から瀬戸焼と見られる陶器の小片が検出された。第Ⅰ、Ⅱ層からは、磁器片が出土しているが、いずれも近世以降のものであろう。

なお、第８図に示した１～４・６・７は第１トレンチ、８は第２トレンチ土壙内、５は第４トレンチより検出された。出土層はそれぞれ１が第Ⅶ層上面、８が第Ⅶb層中、５が第Ⅵ層中、２・３・７が第Ⅵ層上面、４が第Ⅴ層中となっている。

第４節　小　結

今回の中方遺跡の第２次調査は、第１次調査に引き続き、中方遺跡の遺跡範囲を確認する目的で実施されたものであり、その結果については前述した通りである。

本調査は、調査面積約93m^2に及ぶもので、中方遺跡の中を流れる佐東川の護岸工事に伴って行われた。この佐東川は、以前は現在の流路とは異なり、もっと西側を流れていたと考えられている。このことはセクション図からも、現在の流路が遺跡形成後のものであることは明白といえよう。そのため、現在の佐東川によって遺跡が２つに分断された可能性もあり、今回の調査では両岸にトレンチを設定した。しかし、左岸のトレンチからは遺物及び遺構を検出することができたものの、右岸のトレンチはいずれも以前に行われた護岸工事の盛り土であったため、それを確認することができなかった。この点は今後の課題であろう。

次に遺物の出土状況であるが、遺物は主として第１トレンチより検出され、また第４トレンチからも多少まとまって検出されている。いずれも検出された層は、(1)第Ⅳ層下面、(2)第Ⅴ層下面及び第Ⅵ層上面、(3)第Ⅶ層となっている。このほかのトレンチからも若干の遺物は検出されてはいるものの、集中しての出土は見られない。これらの出土状況を考えると、遺物は調査地域全体に認められる反面、第１トレンチ及び第４トレンチ付近に遺跡の中心に見られるような遺構が存在すると推定されよう。

遺物に関しては、今回の調査では土師器・須恵器・山茶碗・陶磁器等が検出されている。いずれも破片で検出されることが多く、完形品あるいは復元可能な土器は少数であった。また、検出された遺物の多くは土師器片であったが、遺跡の土層が粘土層であるため、さらに土器が軟質であることもあって、非常に風化しており、器面の観察が思うようにできない状態であった。そのため、土器の年代については、その器形及び共伴した須恵器の年代により、第Ⅵ層のものにほぼ６世紀、第Ⅶ層のものは５世紀後半のものであると推定されよう。

遺構については、第２トレンチの第Ⅳ層中に土壙が確認されたが、これもトレンチの設定上

遺構の一部のみであったため、その全体の形状については不明である。今回の調査では柱穴等が検出されなかったことから土壙ということにしたが、覆土の状況から見て住居址の可能性が高い。この遺構の時期については覆土中の遺物より、あるいはⅣ層中の灰釉陶器片によって8～9世紀のものと考えられよう。

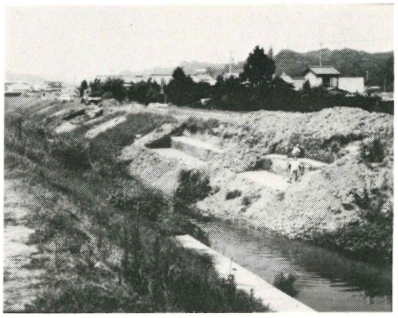
以上が今回の第2次調査についての若干のまとめである。遺物は、主として古墳時代の土師器が多く検出されたが、これらは前回の第1次調査のものよりも時期が古いようである。この点から言っても、中方遺跡においては、6世紀頃には今回の調査区付近が生活面であり、やがてその生活面は南に移動していったことが考えられよう。ただ、佐東川は先にも述べたように以前はもっと西側を流れていたようであり、本遺跡は現在の川の右岸にも及んでいたことも考えられるため、左岸のみだけでなく右岸の調査も今後必要であろう。

第Ⅴ章　まとめ

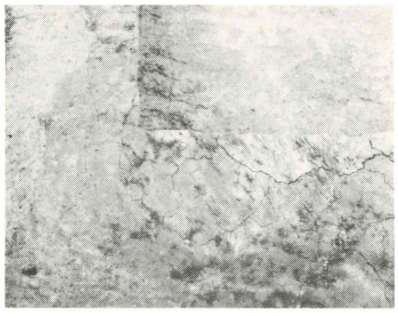
今回の調査は、第1次調査ではトレンチ及びその拡張、第2次調査ではトレンチのみの調査であったため、中方遺跡のほんの一端を知り得たのみで、全容については今後の課題である。ここでは、今回の調査結果及び周辺の遺物の散布状況から中方遺跡を概観してみる。

遺跡台帳には弥生土器、土師器の散布地との記載があり、また地元の郷土史家も過去に弥生時代の土器片を確認しているようだが、今回の調査では出土していない。しかし、遺跡の北西を流れる小貫川の堤防の断面には弥生時代末から古墳時代初頭の土器片がみられることから、弥生時代の遺跡の核はむしろ今回の調査区より北方にあるのではないかと考えられる。古墳時代の遺物は第2次調査である程度まとまって出土しており、5世紀後半から6世紀の年代が充てられる。しかし、遺構は検出されていない。町内を含め菊川流域には多数の横穴群が形成されているが、当該期の集落が中方地内に存在していた可能性が指摘できるであろう。その後は平安時代までの遺物の出土はない。第1次、第2次調査合せて4基検出されている土坑のうち第2次調査で検出された土坑は、全容は明らかではないが隅丸方形であると考えられ、出土遺物から8世紀から9世紀の住居址の可能性がある。また第1次調査においてプラン等は調査区の制約から不明であるが、ピットが検出されており掘立柱建物址の一部である可能性からも、平安時代の集落が存在していたことは十分考えられる。溝状遺構も平安時代のものと考えられるが、覆土は単一層で砂の混入は認められないことから、流路とする根拠は見当たらない。井戸址は中世に属するものと考えられるが、井戸枠はみられず素掘りである。その他今回の調査では、中世に属すると考えられる遺構は検出されなかったが、第1次調査において山茶碗、小皿が多く出土していることと、前出の小貫川堤防周辺の水田にも散布していることから、中世の集落の存在も十分考えられる。それ以後の遺物は出土していないが、中方地内には弥生時代からの遺跡が広範囲に分布しているようであり、その全容の解明は今後の課題といえよう。

1.　試掘時全景

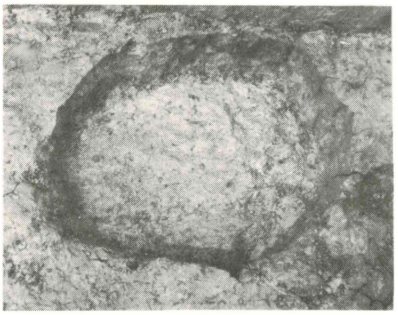


2.　拡張時全景



3.　SK001確認状況

4.　SK001完掘



5.　SK002

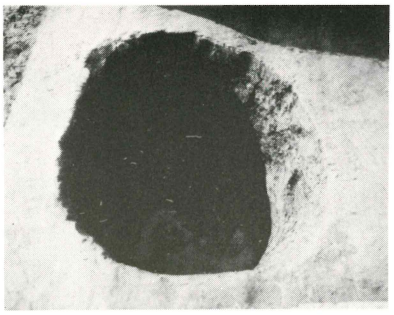
6.　SK003

7.　A 区南全景

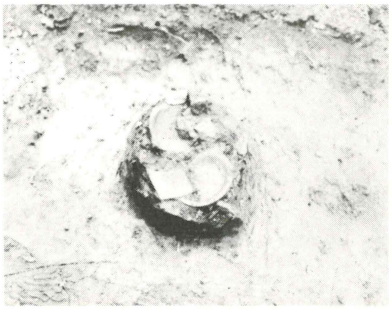
8.　A 区遺物出土状況

PL. 2

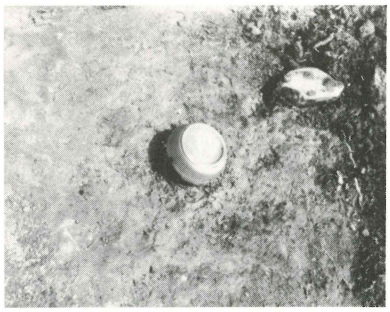
1.　SD001～003及びピット



2.　SE001

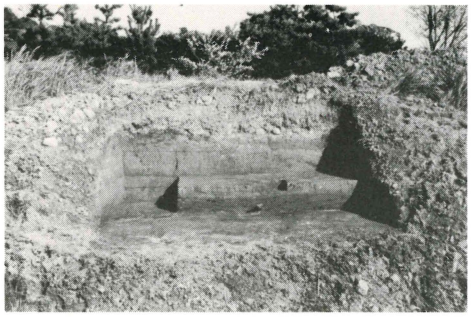


3.　B区遺物出土状況

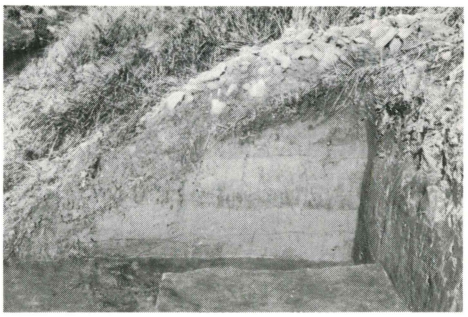


4.　B区遺物出土状況

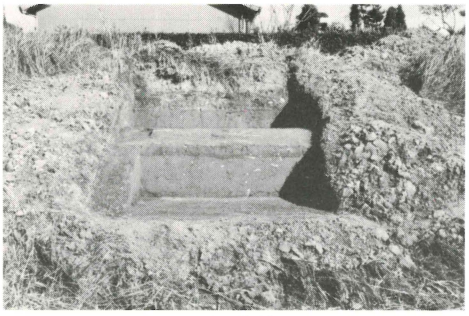
PL. 4



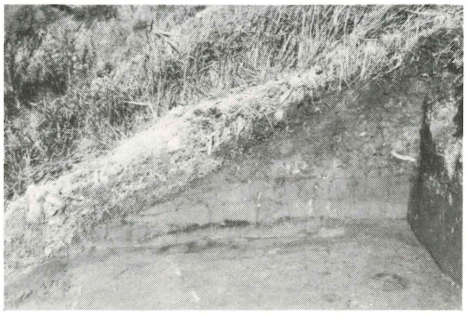
1.　第1トレンチ完掘状態



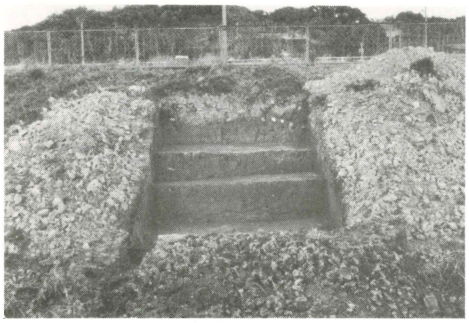
2.　第1トレンチ北面セクション



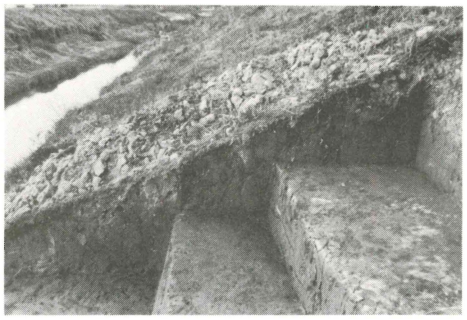
3.　第2トレンチ完掘状態



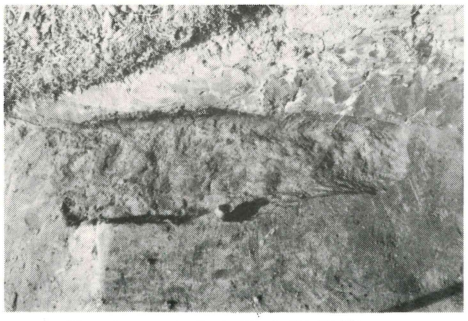
4.　第2トレンチ北面セクション



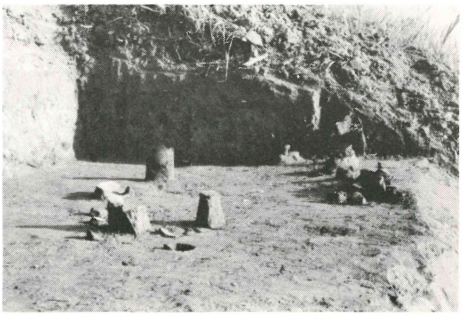
5.　第8トレンチ完掘状態



6.　第8トレンチ北面セクション

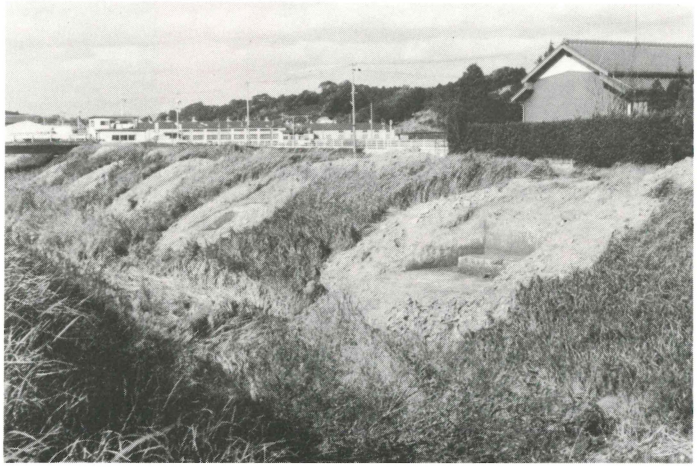


7.　第2トレンチ内土壙完掘状態



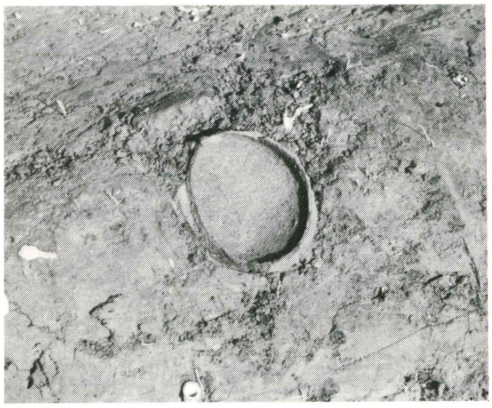
8.　第1トレンチ遺物出土状態

1.　調査前全景



2．第1～6トレンチ完掘状態

3．第7・8トレンチ完掘状態

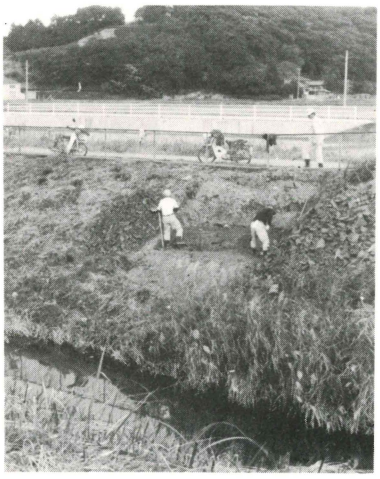


1.　第1トレンチ遺物出土状態

2.　第1トレンチ遺物出土状態

3.　第1トレンチ遺物出土状態

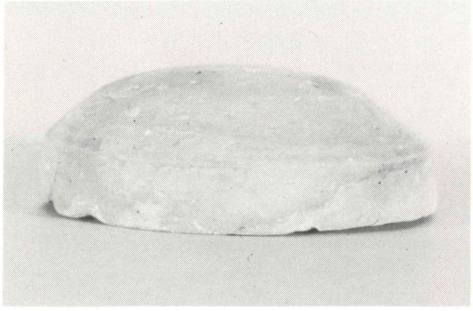
4.　第4トレンチ遺物出土状態

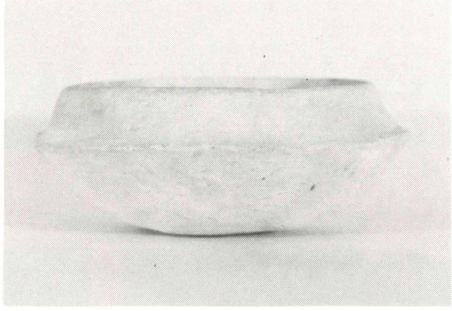


5.　作業風景

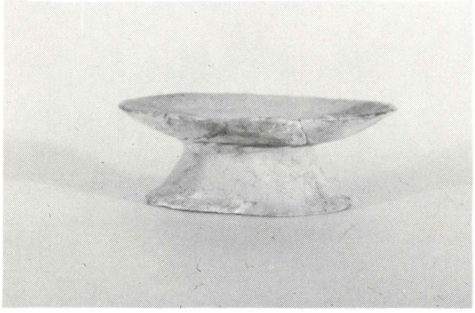
6.　作業風景

PL. 6





1.　第1トレンチ出土遺物



2.　第2トレンチ内土壙出土遺物

3.　第4トレンチ出土遺物

中　方　遺　跡

発　行　日　　平成元年3月31日
発　　行　　大東町教育委員会
編　　集　　中山俊之・粕谷　崇
印　　刷　　㈱　光　　喜
TEL 03－219－2680